

323. 江戸時代の城下町

－膳所城下町遺跡の調査から－

1. はじめに

膳所城下町遺跡は、琵琶湖にかかる近江大橋の西詰付近に所在する遺跡で、滋賀県立膳所高等学校の敷地周辺がその範囲に含まれています。今回、膳所高等学校の校舎新築工事が計画されたため、平成14年度に発掘調査を実施しました。

発掘調査の結果、当初予想された江戸時代の城下町に関する調査成果に加え、奈良時代に聖武天皇が東国行幸の際に宿泊した「禾津頓宮」と見られる大型掘立柱建物や、保良宮に関係すると思われる遺構を発見するなど大きな成果を得ることができました。大型掘立柱建物をはじめとする奈良時代の遺構については、新築される校舎を設計変更し、地域の大切な文化財として地下に保存されています。調査成果は発掘調査報告書としてまとめ、平成17年3月にすべての調査を終了いたしました。

ここでは、江戸時代の調査成果をもとにして膳所城下町の様相について説明したいと思います。

2. 膳所城の歴史

膳所城は、関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康により、



写真1. 膳所城下町遺跡遠景（西から）
（右上の木が茂る部分が、膳所城本丸）

合戦の翌年〔慶長6年（1601）〕に大津城を廃城する代わりに築城されました。築城に関する史料は少なく、そのときの様子を詳しく知ることはできません。しかしながら、すでに商業地として栄えていた大津城の城下町に隣接していることなどから、現在の場所が選ばれたのではないかと考えられています。

膳所城には、大津城の城主であった戸田一西が慶長6年に入封して以降、明治4年に廃藩となる時の本多康稷までの間、20名の城主が生まれています。なかでも本多家は、8代本多俊次が慶安4年（1651）に城主となって以降、明治4年（1871）までの220年もの間城主を代々世襲しており、膳所城の城主といえば本多家と広く知られるところとなります。本多家や初代の戸田家以外には、菅沼家（5代菅沼定芳）、石川家（6代石川忠総・7代石川憲之）が城主となっていますが、これらの城主には三河国出身で、譜代の家臣であるなどといった共通点があり、京都の近郊という地域的な重要性などから徳川家から厚い信頼を受けた人々が選ばれていました。

膳所藩の石高は、当初三万石であったものが6代石川忠総の時には七万石となり、その後10代本多康慶の時に六万石となって以降廃藩までこの石高が維持されることとなります。そして、膳所藩の重要な役割は、京都大名火消や京都警備、さらには東海道が琵琶湖を渡る瀬田橋の維持管理といったことなどが知られています。



写真2. 家紋瓦（紋は本多家の立葵）



写真3.「膳所総絵図」(元禄15年(1702))(中村淑子家所蔵 写真提供大津市歴史博物館)

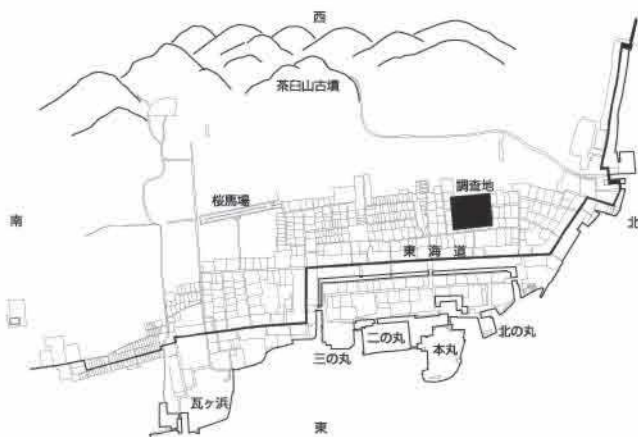


図1.「膳所総絵図」概略図と発掘調査地

3. 絵図に見る膳所城と城下町の姿

膳所城やその城下町の様子を伝える絵図は、比較的多く残されています。

最も古いものは正保年間(1644～1647)に描かれたもので、「正保城絵図」(内閣文庫蔵)として知られています。そこには、この城の特徴となる湖に突き出した本丸や二ノ丸のほか、城下町を貫く東海道とその両側に建ち並ぶ町屋、そしてその山側に広がる中級・下級家臣の屋敷地と寺社などが描かれており、水城として作られた城郭部分と江戸時代に整備される街道を軸

とした城下町の姿を見ることができます。

このような膳所城に大きな変化をもたらしたのが寛文2年(1662)の大地震です。この地震は、志賀町北小松付近を震源として発生したマグニチュード7以上と推定される大地震で、県内をはじめ各地に大きな被害をもたらしました。絵図の中には、このときの被害状況を幕府に伝えるために描いたものと修復後の計画を描いたものが残されています。前者の絵図からは、地震によって本丸などの櫓が倒壊し、各所で石垣が崩壊するなどの被害が発生したことがわかります。そして、後者の絵図からは、修復により本丸と二の丸を合わせ新たに本丸としたことや、三の丸を二の丸に変えその南側に新しく三の丸を築いたことなどがわかり、その後の膳所城の姿がこのときに作られたものであることを知ることができます。

このように改修された膳所城と城下町を非常に詳しく描いているのが、大津市指定文化財になっている「膳所総絵図」(写真3・図1)です。この絵図は元禄15年(1702)のもので、改修された本丸・二の丸などの城郭部分のほか、家臣の屋敷地や寺社、そして町屋といった城下町の状況が極めて正確な測量をもとに描かれ、屋敷地や寺社などの部分にはそれぞれの間口や奥行の長さが記されています。

最後に、幕末ごろの様子を描いた絵図を見ると、城下町の中には、家臣の屋敷地をいくつか取り壊して作

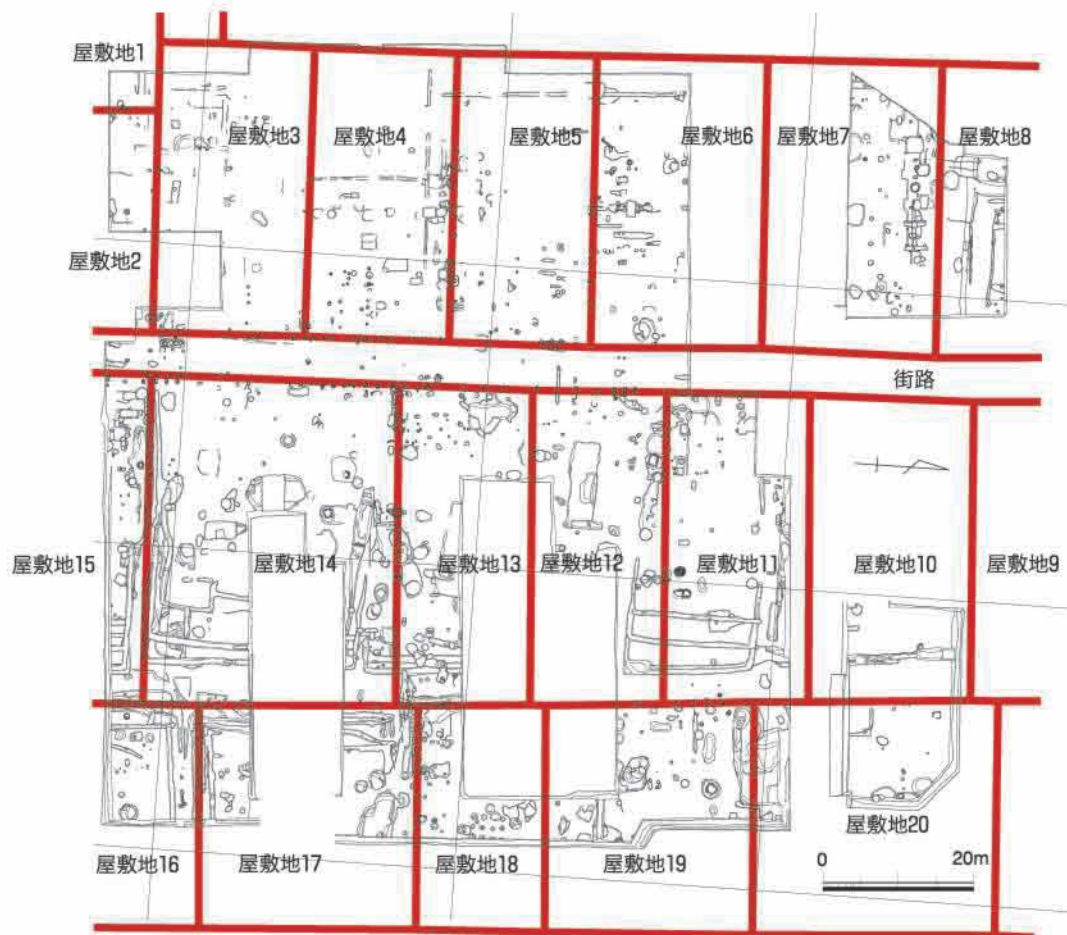


図2. 膳所城下町遺跡 遺構平面図（江戸時代）

られた膳所藩の藩校「^{じゅんまどう}遵義堂」が、調査地の部分に描かれています。遵義堂は、文化5年（1808）に創設された膳所藩の藩校です。絵図には、敷地の奥側に孔子を祀る建物や手習所があり、中央にある広場の両側には稽古場と記される2棟の建物や弓の稽古場が設けられていた様子が描かれています。ここでは、藩士の子弟らに習字や素読などのほか、弓術などの武芸についても教えられていました。

その後、この場所は明治時代以降も、尋常小学校や膳所中学校、そして膳所高等学校と、教育の場として連綿と受け継がれ現在に至っています。

4. 遺構に見る城下町の姿

以上のように、今回調査を行った滋賀県立膳所高等学校の敷地は、幕末までは下級家臣の屋敷地として利用され、その後は屋敷地のほかにも藩校として利用されていました。

では、発掘調査で確認できた遺構をもとに、さらに詳しく当時の状況を見ていきたいと思います。

下級家臣の屋敷地であった頃の状況ですが、絵図を参考にすると、間口に対して奥行の長い屋敷地が街路に沿って並んでいたとみられ、京都の町屋のような景観をしていたものと考えられます。さらに、「膳所総絵図」に示された屋敷地割を調査地部分に当てはめると、東海道から西側に二筋目にあたる南北に延びる街路と19個の屋敷地が調査地内に含まれていることがわかりました（図2）。発掘調査の結果、街路にあたる部分では、塀とみられる連続する柱穴に挟まれた幅5.6mの空閑地が認められ、街路の存在を確認することができました。一方、屋敷地にあたる部分では、屋敷地の区画溝と考えられるコ字状の溝（写真4）が、先の街路より東側で絵図の屋敷地割と概ね等しい位置に認められたことから、その屋敷地割の存在を確認することができました。

そこで、この屋敷地割がいつできたのかが問題となりますが、区画溝などの遺構の年代やそれらの埋土に寛文2年（1662）に発生した大地震の痕跡が認められないことなどから判断すると、この屋敷地割は17世紀中頃以降にできたものと考えられます。また、2回～3

回程度同じ場所で掘り直しがあるものの区画溝に大きな変更は認められないことから、この場所に遵義堂が建てられるまでの間、当初の屋敷地割が継続していたと考えられます。

次に、屋敷地内の状況ですが、屋敷地内では池や井戸、そしてゴミ穴と見られる土坑のほか、便所などといった遺構を確認しています。

池は、同じ屋敷地内で2基見つかりました。ひとつは、平面が円形を呈する直径1.62m・深さ0.24mのもので、壁は瓦の破片と粘土を交互に重ね、底は瓦の破片を粘土の上に貼り付けて造っていました(写真5)。もうひとつは、平面形が隅丸長方形を呈する長さ2.48m・幅1.37m・深さ0.34mのもので、壁は川原石と粘土を重ね、底は播鉢(信楽焼)の破片を粘土の上に貼り付けて造っていました。これらの年代は、播鉢の年代から17世紀後半頃と考えられます。

井戸は、石組みにより作られたものを4ヶ所の屋敷地で確認しました(写真6)。石組みは、人頭大ほどの川原石を積み上げたもので、内径は1m程度を測るものです。

土坑(穴)は数多く確認できた遺構ですが、このうちのいくつかは、埋土の状況などからゴミ穴として利

用されていたと考えられます。そのような遺構からは、陶磁器などの破片やシジミの貝殻・炭などが出土しています。なお、調査地内に含まれる屋敷地のうちやや大きい敷地のものでは、当初に掘られた区画溝の一部が幅2.09m~2.9m・深さ1.36m~1.77mの土坑状に掘り込まれており、埋土の状況などからこの部分をゴミ穴として利用していたと考えられます。

便所は、大甕を2つ並べて据えつけたもの(写真7)や桶を埋めたものが確認できました。大甕の多くは破損していましたが、概ね口径50cm・器高60cmほどの大きさのものであり、主に信楽で作られたものと考えられます。

これらの遺構は、屋敷地内の奥側で比較的多く認められました。特に、池の見つかった屋敷地は、屋敷地の奥を庭として利用していたと考えられます。一方、屋敷地内の街路に近い側では、遺構のない空地が比較的多く認められる傾向があります。おそらくは、そこに建物が建っていたと考えられます。このことは、街路に面する側に建物が建ち、その奥を庭などに利用する当時の城下町のあり方に合うもので、膳所城下町でもそのような町並みが広がっていたということがわかりました。



写真4. 溝(屋敷地11・北から)



写真6. 井戸(屋敷地14・北から)



写真5. 池(屋敷地11・南から)



写真7. 便所(屋敷地11・北東から)

このような屋敷地を解体して造られたのが遵義堂です。絵図を見ると、それは概ね屋敷地1~6・11~15あたりに造られたことがわかります。

残念ながら、遵義堂については建物などといった藩校そのものの遺構を確認することはできませんでした。その頃にゴミ穴として使われたと見られる土坑をいくつか確認することができました。このような遺構からは陶磁器や硯などといった遺物が多数出土し、当時の状況を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

5. 出土遺物に見る城下町の暮らし

今回の調査では、江戸時代の遺物がたいへん多く出土しました。それらからは、城下町に住む人々の暮らしぶりを窺うことができます。以下に、その主なものを紹介していきます。

・ 飲食具

出土遺物のなかで多くを占めるのは碗や皿などといった飲食具で、江戸時代以前から見られる陶器の製品に加えて、磁器で作られた製品が多く認められます。

磁器は、陶土から作られる陶器とは異なり、陶石という白色の石を砕いて作られるもので、1,200度前後の非常に高い温度で焼成されるため、陶器に比べ硬質

な焼物となります。国内での生産は、江戸時代初め頃に朝鮮半島から連れてこられた工人たちにより肥前地方（佐賀県・長崎県）で開始されました。その後、磁器の製品は量産化されたこともあって急速に広まり、江戸時代中頃までには主要な飲食具となりました。製品は「染付」と呼ばれ、中国のものを真似た文様のほか、花・樹木・風景などの文様を「呉須」という青い絵具で描いたものが主として作られていました（写真8）。このような磁器は、幕末ごろには愛知県の瀬戸をはじめ各地で生産が開始され、現在に至るまで日常生活において広く使われています。

出土した磁器には、「焼継」と呼ばれる補修が行われたものも認められました。それは、白玉と呼ばれるガラス質の接着剤を熱で溶かし、破損した磁器を接合する技法で、幕末頃に普及し専門的に行う職人がいたことが知られています。焼継が施されたものには、補修の依頼主を示すと見られる文字や記号が、高台の内側に白玉で記されたものもありました。この焼継は、壊れたものを修理し再利用する安価な方法として広く一般に行われていたようで、碗や皿などの日常品を中心に認めることができます。

一方、陶器は、中世からの生産地である瀬戸焼（愛知県）のほか近隣の京焼や信楽焼などの製品が出土しています。

製品の多くは黄緑色の透明釉や暗褐色の釉薬などを施したものでしたが、京焼や信楽焼と見られるものの中には、赤・青・緑などの色鮮やかな上絵付けにより飾られた碗（写真9）などの製品が含まれていました。このような陶器は、同じ時代にあっても農村部の遺跡からはあまり出土することがなく、農村部では先ほどの磁器の量産品が主に使用されていたことが知られて



写真8. 磁器・碗（肥前・18世紀）



写真9. 陶器・碗（京信楽・18世紀）



写真10. ヨーロッパ磁器・皿（ベルギー・19世紀）

います。したがって、先に述べた陶器の碗などは、城下町に住む人々の嗜好を示すものであると言えるでしょう。また、出土遺物にはベルギーのファブリック・セラミス社の皿（写真10）が認められましたが、幕末頃に都市部を中心に流通したとされるヨーロッパ磁器の存在も同様に考えられると思われます。

出土した陶磁器の多くは広域に流通したものでしたが、中には、江戸時代中頃から茶器を生産していたことが知られる比良焼の碗や、幕末頃に地元の窯で作られ唐橋の風景を描いたもの（写真11）、そして、同じく幕末頃に姥ヶ餅を販売するために作られ、松尾芭蕉の句「千代の春 契るや尉と姥ガ餅」と書かれた皿（写真12）などといったこの地域ならではの陶器も出土しています。

・調理道具

調理道具は播鉢・^{ほうらく}炮烙・鍋などのほか、ややこれらとは性格が異なりますが江戸時代に盛んに使用される焼塩壺（写真13）が出土しました。

焼塩壺は、蓋を伴う素焼きの小型容器で、粗塩を入れて運搬し保管する目的と、容器を直接焼いて粗塩を

精製する目的のために使用されます。主に、武家屋敷や社寺、城館などの遺跡から出土しており、限られた階層の人々に普及していました。

このような焼塩壺に入れられた塩は、鯛などの身の厚い魚を食するとき使用されました。黒船で来航した、ペリー一行を迎えた饗宴を描く絵図には、膳の上に鯛とともに出された焼塩壺が認められます。焼塩壺の存在は、屋敷内で行われた豊かな食事の様子を示すものと言えます。

なお、焼塩壺の側面には、生産者を示す刻印のあるものもあり、今回の調査では「泉州磨生」や「泉湊伊織」といったものが確認できました。

・信仰と鑑賞の道具

出土遺物の中には、城下町に住む人々の信仰を伝える遺物もあります。

それは、素焼きの土人形です。形は様々なものがあり、鳥・猿・犬・亀・鯛・唐子・天神・大黒・西行な



写真11. 陶器・鉢（瀬田焼か・19世紀）



写真12. 陶器・皿（姥ヶ餅焼・19世紀）



写真13. 焼塩壺（「泉湊伊織」・18世紀）



写真14. 土人形（天神／大黒・18世紀）



写真15. 箱庭道具（舟・18世紀）

どがあります(写真14)。当時の人々はこのような人形に、病にかからず健康であることや子供が健やかに成長すること、そして五穀豊穰や商売繁盛などといった願いを託していたと考えられています。

土人形は、社寺参詣の土産物などとして売られていました。伏見人形はその代表的なもので、京都の伏見稻荷神社へ参詣に来た人々に対し売られていたものです。今回の調査例が示すように、それらは各地に持ち帰られてそれぞれの屋敷のなかで祀られていたと考えられます。ただ、お墓の中から出土することも多く、亡くなった人の副葬品としても使用されていたようです。作り方は、紐状にした粘土を用いる方法と型を用いて粘土を成形する方法があります。後者で作られた遺物の表面には、型から離れやすくするためにふりかけられた雲母が残り、きらきらと光っています。また、中には、表面を赤色や黄色などに彩色されたものがあります。出土したものには、うっすらとその痕跡を残すものも多く、おそらく当時は色鮮やかな人形であったと思われる。

このような土人形と同様の方法で作られたものが、箱庭道具です。箱庭道具には、城・塔・橋・樹木・舟などを象ったもの(写真15)があり、色鮮やかに彩色されたものもあります。これらは小さな箱や盤の上に並べられ、棚飾りなどとして鑑賞されていたと考えられています。

当時の屋敷内には、それぞれの目的に応じてこのような人形などが飾られていたのでしょう。

・文房具

文房具には筆・墨・紙・硯などがありますが、発掘調査では硯や水滴などが出土しています。

硯は、長方形の平面形をした概ね大小2種類の大きさのものが出土しています(写真16)。大きなものでは長辺21.5cm・短辺9cm、小さなものでは長辺7.8cm・短辺3.3cmのものがああります。それらの多くは、きめ

が細かくやや黒っぽい色をした近江の高嶋石で作られていました。ほかには、硯背(墨を磨る面とは逆の面)に「赤間 大原」と刻書され、やや赤黒い色をした周防(山口県)の赤間石で作られたものなどが出土しています。高嶋石や赤間石は、硯に使用される著名な石材です。

硯は、ほとんどが割れた状態で出土しました。また、中には墨を磨る部分が大きく溝状に抉り込まれたものもありました。このことから、これらの硯は長い間使用され続けたものと考えられ、大切に扱われていたことがわかります。

水滴は、墨を磨る際に硯に水を差す小さな容器で、一方に水を注ぐ穴が開けられたものです。今回の調査では、一般的な磁器で作られた直方体のもの以外に、色鮮やかな釉薬を施し牛や蜜柑などの形を象ったもの(写真17)が出土しました。特に、後者は、膳所焼の中興の窯として知られる梅林焼のものと思われ注目されます。

膳所焼は、江戸時代前期に膳所から瀬田にかけての地域で、茶陶などを中心に生産が行われていました。褐色の釉薬が施された茶入や水指などが伝世品として伝えられているほか、江戸時代の文献にもたびたびその名が登場します。たとえば、延宝6年(1678)に膳所を訪れた土佐尾土焼の陶工森田久右衛門の『森田久右衛門江戸日記』には、「こく不」や「大江」で生産していた窯の存在が記されています。現在、この地域では数基の近世窯が知られていますが、その実態はよくわかっていません。唯一「国分窯」と称されるものが、膳所焼である可能性がある窯として知られているのみです。

この膳所焼が衰退したのちに再興されたのが、梅林焼です。幕末頃には、色鮮やかな釉を用いて様々な製品を作っていたとされており、金森得水の『本朝陶器攷證』のなかには中之庄村の梅林山から土を取り茶器を作っていたことが記されています。伝世品には、



写真16. 硯



写真17. 陶器・水滴(梅林焼・19世紀)

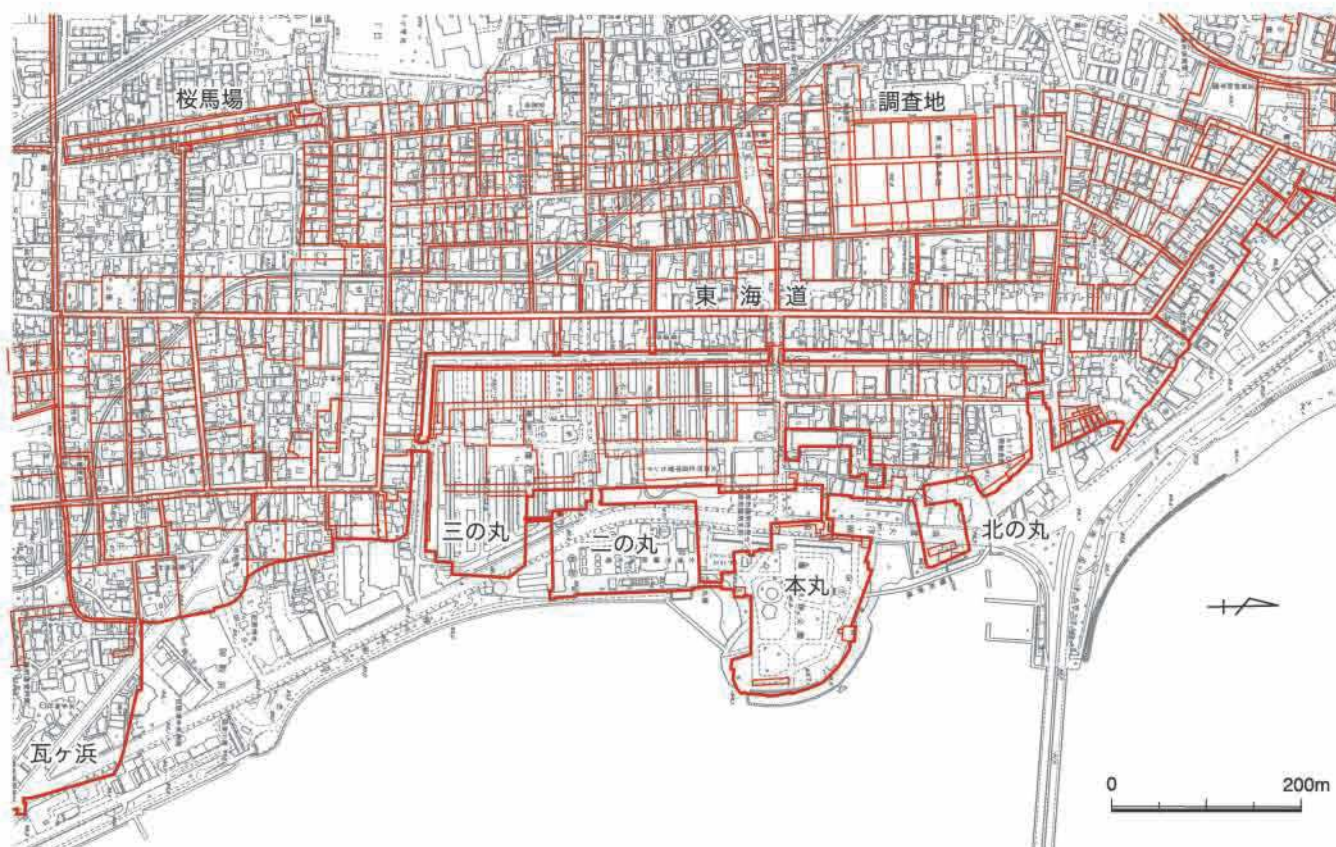


図3.「膳所総絵図」の町割と現在の市街地

色鮮やかな釉を施した鉢や坏などのほか、今回出土したような茄子・蜜柑・瓢箪などを象った水滴などが知られています。

以上のような文房具は、遵義堂内で使用されていたと考えられます。特に、地元で生産され、色鮮やかな釉を施した様々な水滴の存在は、藩校内の様子を物語るものとして興味深いものであります。

これらのほかにも様々な遺物が出土しており、女性を使用した身だしなみの道具（口紅を入れておく磁器の紅皿・髪を整えるための鬢水入れ・銅製のかんざしなど）や煙管といった豊かな暮らしぶりを伝えるものなども見られます。

6. おわりに

以上のように、今回の調査では、江戸時代の膳所城下町について多くの情報を得ることができました。

発掘調査で確認した屋敷地内の様子を示す遺構や、生活の中で使用されていた陶磁器をはじめとする様々な出土遺物は、絵図などの資料以上に城下町での暮らしぶりをより詳しく私たちに伝えてくれています。

現在の市街地に残る街路や町並みは、「膳所総絵図」に描かれたそれと比較すると、いまなお多くの部分にその痕跡が認めることができ、近世の城下町をもとに

発展してきたということがわかります（図3）。今回の調査成果が、私たちの生活に深く関わる江戸時代の歴史について、より関心を持っていただくきっかけになればと思います。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 中村智孝）

<主な参考文献>

- 『図説江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編 2001
- 『江戸文化の考古学』 吉川弘文館 2000
- 『新修大津市史』3 近世前期 大津市 1983
- 大上直樹「古絵図より見た膳所城」（『滋賀文化財だより』NO97 財団法人滋賀県文化財保護協会 1985）
- 能芝 勉「二つのヨーロッパ陶器」（『リーフレット 京都』NO109 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古博物館 1998）
- 安芸穂子「土人形について」（『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 東京大学埋蔵文化財調査室 1990）
- 河原正彦「近江のやきもの—近世の動向—」（『日本やきもの集成 6 近畿Ⅰ』平凡社 1981）
- 稲垣正宏「大津南部地区における近世窯業の展開」（『関西近世考古学研究』1 1991）